地域と共に歩む「木考会」活動について

－木による地域共同体への夢－

旭川営林支局森林活用課長　米陀友秀

はじめに

日本の森林は，戦前と戦後しばらくは木材産出の場とみなされてきた。特に木材は戦後の復興資材として，或いは燃料革命までの製薪・木炭原料としてその需要はおう盛であったものであった。その需要に対処するため，昭和30年にはいち早く木材の輸入自由化が始まったところである。

需要量は昭和21年度には約200万立方メートルであったのが,その後の日本経済の高度成長とともに需要は急速に伸び昭和57年度には１億立方メートルを突破し，この10年ばかりは１億１千万立方メートル台で推移するとともに，国産材の占める割合も22％前後となっている。

一方，国民の森林に対する期待・要請は，総理府の世論調査によると，木材生産のみならず，国土の保全，水資源のかん養などの公益的機能の発揮に向けられている。特に昨年の西日本各地の渇水による水問題は，重要な政治課題となり，その対策としての森林づくりに国民の関心が高まったところである。

今後は森林を維持造成する林業の役割について，一層国民の認識が深まっていくことになると考える。

そこで，これからの森林・林業及び木について模索していきたいと，地域において「木」を生活の基盤としている河川の川上側と川下側の者が集まって，「木への理解を広め，地域林業・林産業の活性化に寄与する」ことを目的に活動している士別市の「木考会」活動について紹介する。

士別市の林業・林産業の概要

士別市は北海道の中央部旭川市の北方約50キロメートルに位置する人口約２万５千人の第１次産業を基幹とする田園都市である。

最近では東洋一の自動車テストコース（トヨタ自動車工業株式会社）のあるところ，サフォーク種の綿羊１千頭を飼育しているところとして有名である。

市の人口は，昭和36年の４万１千人をピークに米の生産調整等の影響もあって年々減少してきている。

林業は，北海道で二番目に長い天塩川の上流域にあることから，北海道開拓の進展とともに流域の豊富な天然林資源の開発によって造材業・製材業が早くから発達し活況を呈してきたところで，この地域での最初の木工場が操業したのは明治35年のことである。特に流域のアカエゾマツは，大正年間に天塩川を流送で送り天塩町の河口から帆船によって関西方面に大量に運ばれ，「天塩檜」の銘柄材で一躍有名になったところである。

士別市にあるバス会社，士別軌道株式会社は，大正８年から昭和33年まで，この地域の林産物輸送を主としていたが，朝日営林署の森林鉄道の廃止に伴って，関連輸送の軌道業も廃止したものである。軌道という名前を使用しているのはその名残りでもある。

その後の造材業・製材業の消長はあったが林業・林産業等の発展による士別市経済への寄与は計りしれないものがあったのである。

平成５年における士別市の森林面積は約３万７千ヘクタールでそのうちの約５割は国有林で他は道有林・市有林および私有林である。

表1　　平成4年12月末現在

統計別	項目	単位	数量	備考
人口	人口	人	25,674	
	世帯数	世帯	8,834	
	就労人口	人	14,300	
地目	総土地面積	ha	60,100	(国有林17,600ha)
	森林面積	ha	36,700	総蓄積280万m³
工業	木材・木製品	社	19	うち造材・造林8社
	木工・工芸	店	2	
	造園業	社	1	
経済	木材産業生産額	億円	77	全製造額の10%
	従業員	人	540	
事業量	年間伐採量	m³	62,000	支庁資料(平成2年度)
	原木消費量	m³	74,000	外材等を含む
行政機関	営林署　上川支庁林業指導事務所　市農地林務課			
	(団体)森林組合　林産協同組合			

士別市の林業・林産業関係の統計要覧は**表1**のとおりである。

市の就業者数に占める林業・林産業従業員の割合は2%，540人である。

木材産業の生産額は77億円で全産業の生産額に占める割合は約10%で，食料品，窯業土石製品に次いで第三位である。ちなみに，平成6年における市内の林業・林産業関係の事業体は20社である。

また，地域の林業・林産業関係団体の集まりである士別地区林産業協同組合の傘下組合員は16事業所である。組合では昭和60年に，新林業構造改善事業によって全国でも珍しい帯のこの目立て施設工場を作っている。この工場によって，市内の製材工場はそれまで外部に発注していたのこの目立てや整形について，組合自体で行えるようになり，製材工場の経費削減に大きく貢献しているのである。

会結成の背景

道内の林業・林産業を取り巻く状況は，天然林資源の減少，木材生産地の奥地化，バブル経済による需要減退，木材に代る代替材の進出，さらにはこの数年の円高ドル安基調による外国産材の攻勢等によって，極めて厳しい状況下に置かれているのである。特にこの1～2年は安い価格のロシア材等によって，道産材は押されっぱなしである。

北海道北部の内陸に位置している士別市内の製材工場にとっては，安い外国産材を製材する海岸立地工場との競争，大消費地である札幌市までの輸送距離や過積載問題に端を発した運賃値上げ等のハンディを背負っていかなければならないという厳しい状況にある。

このようなことから，官・民それぞれ置かれている立場・状況は違っても生き残りをかけて現状を打開し，手を取りあっていくことが必要でないかと考えたところである。

そこで「木」を通して生活している同世代の人達と気楽に話しあえる場があってもよいのでないかと呼びかけて平成元年5月に結成したのが木を考える会，すなわち，「木考会」である。

会員

会員は40歳代の士別地区林産業協同組合傘下の事業所と市内の林業関係官公庁の中堅幹部で次の世代を担っていく人を対象に，士別地区林産業協同組合専務理事にお願いして選んでもらい，各人に本会結成の趣旨を話したところ，心よく入会して頂いたところである。

会員の構成

会員数は，平成6年3月末現在23名で年齢は上は62歳から下は29歳と幅広く，平均年齢は45歳と俗にいう今が一番脂の乗っている世代でもある。

職務上の役職は，社長・専務・部長・課長・店長および工場長等で各事業所において責任ある地位にあって活躍している人達である。

顧問には，士別地区林産業協同組合理事長，上川支庁士別地区林業指導事務所長，営林署長をお願いしている。

会員の構成は**表2**のとおりである。

表2

会員数			職場数			役職別		平均年齢
川上	川下	計	川上	川下	計	社長 1名 専務 2名 部長 1名 課長 4名	店長 2名 工場長 6名 係長 6名 主任 5名	45才 (29～62)
11名	16名	27名	5社	9社	14社			

会の目的

木を通じて生活しているという共通の基盤にあることから，会の規約においては目的を「木への理解を通じて会員相互の親睦を図る」としている。

あえて「木への理解」としたのは，「木」について興味を持っている人は誰でも入会できるようにということで平易な表現にしたものである。

会の役員

役員の構成は，会員が「木を育てるところ」と「木を加工するところ」とがほぼ半数づつであるところから，それぞれ3名づつとした。

それはまた，木を育てて伐り，それを加工するという，川の流れに例えると上流域と下流域の置かれた立場を理解しあって会の運営に反映されることにつながると考えたものである。

会の事業

「地域の林業・林産業の活性化に寄与する」ことを事業の目的として，その活動については，道産材の普及宣伝のために木製品の試作・加工・販売，地域の緑化・啓蒙，さらには会員相互の情報交換や視察旅行などを事業としている。

会の規約―抜粋（名称・目的・会員・事業）

（名称）

第1条　本会は，木考会という。

（目的）

第2条　本会は，「木への理解」を通じて，会員相互の親睦を図ることを目的とする。

（会員）

第3条　本会の会員は，本会の目的に賛同する者とする。

（事業）

第4条　本会は次の事業を行う。

(1) 地域の林業，林産業の活性化への寄与

(2) 郷土の緑作り

(3) 見学等情報の交換

(4) 木製品の試作，加工

(5) 会報の発行

（事務局・役員・例会・会計・入会）等は省略

この規約は平成元年5月22日から施行する。

具体的な活動

1）例会

会の結成後5年になるが，これまで年平均4回の例会を開催している。

例会では木の情報交換や各職場の紹介ということで，1～2の事業所の10分間スピーチによる意見交換，木考会の活動を積極的に市民にアピールするための打合せ，イベントにおける一社一品の創意工夫などを話しあっている。

また，会員相互の親睦を図るために例会後，時々「のみニケーション」を行っている。

2）青空トンカチ教室

士別市農業祭りと天塩川祭りにおいて，会員の製材工場から出る端材を利用して子供達に，木のぬくもり，あたたかみをじかに知ってもらおうと青空トンカチ教室を開催しています。

また，子供達の自由な発想力・創造力を発揮してもらい，自ら作った木工品は無償で持ち帰ってもらっている。

この青空トンカチ教室は，市民や父兄からも大好評で毎回子供達が大勢（80人ぐらい）押しかけ盛況のうちに4～5時間で端材がほとんどなくなってしまって追加するほどです。

3）木工品の展示即売

各会員の工場や会員のアイデアで作ったテーブル・家具・花台・ミニ椅子（いす）・表札等の木工品を士別市農業祭りと旭川市で行なわれている森林（もり）の市（いち）

において展示即売し，「木の良さ」を市民に普及宣伝している。

4）キノコ類の即売

森林の恵みであるシイタケ・ナメコ等の特用林産物を農業祭りと森林の市において販売し，キノコの需要拡大普及に努めている。

5）かがり火によるイベントの盛り上げ

かがり火は最古の原始的な照明方法で，お祭りの夜の雰囲気づくりにふさわしいものである。

木の燃える様は，ロマンと幻想に満ちたもので若者たち，特に若い女性に大変人気がある。

士別市の隣りの下川町はアイスキャンドルで有名であり，それなら士別市はかがり火を焚(た)いてお祭りを盛り上げようと，造材現場の端材を利用して平成元年から始めたもので，すっかり定着している。

キャンドル台の製作には，市内の企業から五十万円の寄付を仰いで，1基一万円で50基作ったものである。

毎年の夏と冬のお祭りには，市商工会議所から頼まれて会が一役担っているところである。

6）視察・研修

会員の見聞を広げるために，年1回木材関係の工場等を視察している。

また，会の顧問による講演や会員の外国視察者の発表など会員相互の啓発にも努めている。

7）士別市理事者との懇談会

平成3年には，市理事者と懇談会を行って，次のような意見交換をしたところである。

①川上対策

林業労働者の就労離れをいかにして止めるか。林業技術者養成の必要性について。森林の基盤整備のあり方について。

②川下対策

製材工場の新技術導入に対する共同化・団地化，補助金問題，銘柄材化等の地域産業の振興について。

③川中対策

児童・生徒への林業教育の重要性と森林教室の普及・充実，市民参加による植樹祭・育樹祭，緑豊かな街路樹の造成・整備について。

④木材利用対策

公共住宅・建造物・看板等を，積極的に地場産木材を利用することについて。

8）木についての聞きとり調査

平成３年８月の士別市農業祭りにおいて，来場者100名から「木」についての聞きとり調査を行いました（**表３**）。この結果からみると「木」についての指向は根強いものがあることがうかがいしれる。

表―３

木に親しみを感じますか	感じる	85	感じない	15
木の家が好きですか	好き	98	きらい	2
庭に木がありますか	ある	62	ない	38
街に緑が多いですか	多い	52	少ない	48

活動に成果

会ができて５年になりますが，まだ端緒についたばかりで，この間の成果としては，

１）イベントにおける木製品の展示即売を通して市民に木のよさをアピールできたこと。

２）青空トンカチ教室は，毎回盛況で子供達に工作の楽しさと創（つく）る喜びを知ってもらったこと。

３）会員の事業所の青年たちが，イベントの応援等を通して同業人同士としてのつながりができたこと。

４）イベント等における会の活動が認められて，平成２年度に士別市から産業将励の補助金二十万円が認められ毎年予算化されたこと。

５）かがり火は，毎年の夏・冬のお祭りには欠かせないものとして組み込まれ，市民に夢とロマンを与え親しまれていること。

６）士別市林業振興対策協議会（会長・市長）と士別地区林産協同組合の青年部的役割を担って，イベントにおける道産材の需要拡大に一役買っていること。

などが挙げられる。

むすび

文明の発達は，緑を破壊し文明を衰退させてしまったと言われている。

四大文明発祥の他のメソポタミア・エジプト文明の地はかって緑豊かな沃野（よくや）であったが，今は砂漠化してしまっているのはその例である。

文明を守るためには緑がなくてはならないという考え方に変わってきつつあるところである。

平成５年のブラジルでの「地球サミット」において，地球温暖化防止のためには大気中の炭酸ガスを固定化する森林を持続的に経営することが必要であり，そのためには森林を守り・造成することが急務である旨の宣言がなされたところで，以後，マスコミは森林についての報道を多く流すようになった。

最近，総理府が行った緑に関するアンケート調査では，国民の８割が，森林に対する緑の役割に期待しているところである。

一方，戦後営々と造林してきた1000万ヘクタールの人工林は，21世紀には伐期に入り，増大していく国産材の需要拡大を図らなければならないところである。このような状況において，森および木に携わっている者にとっては，まさに追い風を利用していける時代に入ったのである。

現在の林業・林産業の取り巻く状勢は厳しいが，これを乗り越えるためには「木」に携わっている川上側と川下側の連携が必要であると考える。

そこには「木」を媒介として生活している者，すなわち，景観・健康・運動・学習・文化・研究等のソフトの分野から，造林・生産・加工・流通・販売・建築などのハードな分野までのすべての者が，時代背景を認識して地域におけるジョイントベンチャーとして断続的・継続的に提携して伸展していかなければならないと考える。そのためには，森林に関連するあらゆるものを商品としてその価値を高め，将来は売り手市場としての森林総合産業から，ベンチャー企業として地域に根ざした新しい木の文化創造の場として，「木」による地域共同体として発展していかなければならないと考える。

「木考会」は，発足して５年の小さなグループですが，ささやかな活動を基に地域における林業・林産業の活性化に少しでも役立つことを，会発足に携わった者として陰ながら願うものである。